

5章 セルフ授業（子ども全員活躍型）

1 複線型・単線型の学び(備品 266)

(1) 複線的な学び

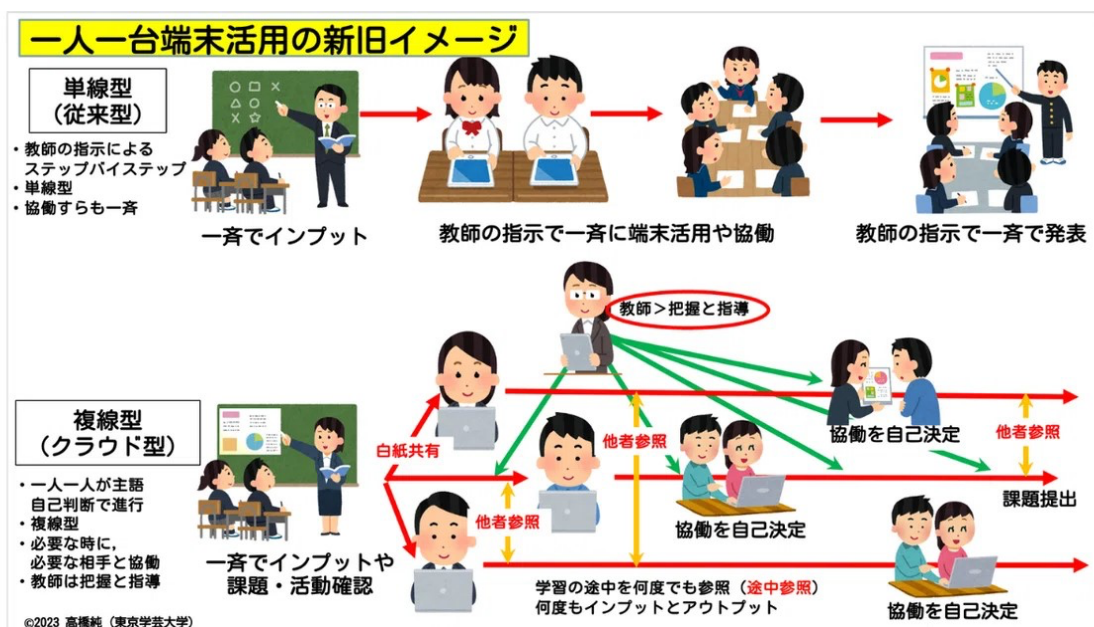
複線型の学びは、従来の直線型の問題解決の段階を踏む形式に対し、学び方の道筋が複数に分かれる。子ども一人ひとり（学び手）が学習課題に自分で判断し、調べたりまとめたりして、相手に自分の考えを伝える。協働的な活動を自分に合う適切な場所を選び、学習をしていく学び方である。このモデルは、個々の子どもが自分の興味や能力に応じて学びを進められるよう、柔軟で多様な学びの形を提供するものとなる。この複線型の学びは、探究的な学びやキャリア教育とも深く結びついている。今後の学び方の一つとなるだろう。

複線型の学びは、ほとんどが個別学習である。

タブレット等で①学習課題の選択 ②子どもの個別的な解決活動 ③個同士や自然発生的なグループで交流（子どもの自然体のアウトプット）し自分の言葉で考えを書く。他者の考えを比較分類する中で不足項目を補う④まとめを共有 ⑤練習問題（AIドリル）の学習経路をとる。

これまでの単線的な（従来型）問題解決的な学習過程と同じような段階を踏む。個別の学びが中心となる学びだ。このモデルビデオは、265号youtu.be Intel Presents-project Bridge をご覧いただきたい。この学びは、タブレット等のICTによる学びが豊かにならなければ複線的な学びとはならない。ある程度、タブレットの学びが充実した学校は、複線的な学びの充実に向かっている。なお、個別最適で協働的な学びも、ゆくゆく姿はこの複線的な学びになるだろう。自由進度別学習も複線型の学びだと思う。

複線型授業



7

- ・単線型は、従来の一斉授業。または、一つの課題をグループや学級全体で追究していくような授業。
- ・複線型は、完全に一人で課題を追究していく型。または、個人で課題を選択し、学び方を選択し、グループで追究し、まとめや振り返りは自己学習していく学び方である。

複線的な学びの成果と課題

子どもたちがひたすらタブレットやパソコンに向かう。特に、ICTの得意な子どもたちにとって自分で進められるのでより一層学びに向かうことができる。だが、**学びが苦手な子どもを、このICTによる手法の学び方で本当に救えることができるだろうか。**学校は、「仲間から教わり、仲間に教える場」だ。この点を考え複線型の学びの構築にあたることが重要だと思う。

(2) 単線的な学び

単線型とは、現在の学びの形（授業スタイル）である。すなわち、全ての子どもが同じカリキュラムを同じペースで学ぶ。学年が上がるにしたがって難易度が上がっていく。単線型の学びでは、子ども全員が同じ学習課題（めあて）解決に向かって進み、同じ評価基準で評価される。このモデルは、一定の学力水準を確保するという点で有効である。だが、子どもの多様性や個々の興味、得意分野を十分に尊重できないという課題がある。

単線型の学び（教師が中心にいる一斉学習的な学び）は、一斉学習が中心で学習課題や見通しを確認→教師の指示によりタブレット学習や協働学習→教師が中心にいる考察→教師が中心にまとめをする→振り返りをする形式だ。私たちの「学習スタンダード」は、単線的な学びだが、一斉学習形式を極力減らし、協働的な学びの形式で学習過程を創り上げてきた。子どもたちは、タブレット学習に移行しながらも協働的な学びで学習課題の解決方法を身に着けている。「学び方」の習得も出来ている。基礎基本学習では、従来の一斉指導型も並行して行い、学力の向上も図っている。このスタンダード型の学びは、すべての学び方の基盤である。単線型であっても、この学びを常に真ん中におこう。

(3) 異学年交流型学び（単線型の学び）

複線型の学びは、ICTによる学びだ。だが、同一学年同一指導で学ぶ内容からの抜けきれない面がある。それを補うのが異学年交流型学びだ。全校数学授業、複式学級での異学年合同授業等もここに当たる。小規模校を経験してきた教師は、異学年交流型学びの良さを熟知していると思う。

2 PBL学習とプロジェクト型学校組織改革との連動（備品 293）

探求型学習やPBLという学びのアプローチがある。これは、驚くことではない。多忙感に追われていると「新しい単語」に気付かないかもしれない。今一度、その語源やねらいについて考えていただきたい。丁寧にその語源をたどると大学教育や高等学校教育からきていることに気付くと思う。

(1) 文部科学省の「PBL」

「今後の科学コミュニケーションのあり方について」（平成31年2月8日科学技術社会連携委員会）を踏まえ、講義に加えて、地域（実社会）の課題解決を行う現場での「PBL（**Project-based Learning：問題解決型学習**）」により科学コミュニケーション活動に必要となる以下の能力を有する人材を育成する取組を支援する事業。

(2) SBL・アクティブ・ラーニング・2種類のPBLの確認

①SBL[SubjectBasedLearning]

SBLは「Subject Based Learning」の略称で、「科目進行型学習」や「知識習得型学習」などと訳される。教師が教科書に沿って授業を進めていく学習である。子どもは教師の説明を聞き、板書をノートやワークシートに写し、教科書を使って問題を解き知識を習得。SBL型授業は、従来から行われている授業スタイルである。知識の習得には効果があるが、子ども主体性や探求心を育む面で課題。

②アクティブ・ラーニング

子どもが受け身の学習方法ではない。グループディスカッション、ディベート、グループワークなどを通じて子どもが主体的に学ぶことを重視する学び方だ。実施する上において、教師の負担増加や、授業が遅れる心配、学業成績が低下するリスクなどを指摘する声を聞いた。教師主体の授業から抜け出せていない。

③PBL

PBLの根底には、ジョン・デューイ（アメリカの哲学者）の考え方がある。PBLは、アクティブ・ラーニングの一つである。方法は2つある。

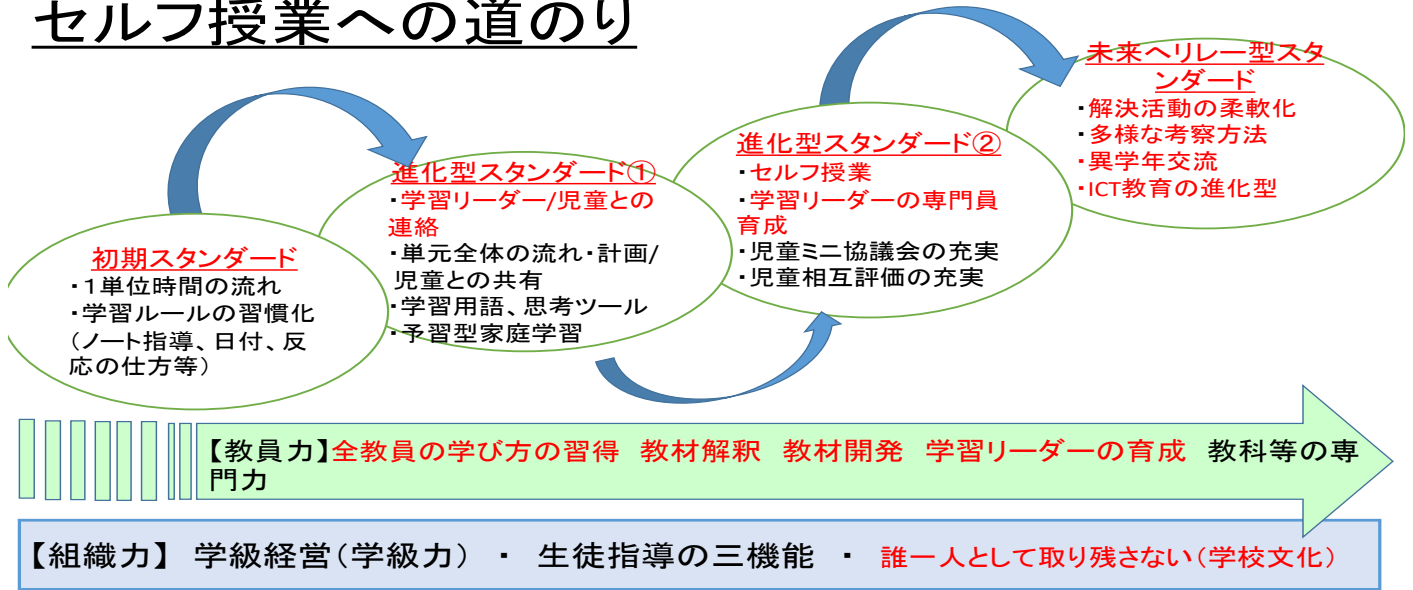
ア PBL「**Problem Based Learning**」は、**問題解決型学習/問題基盤型学習**のことをいう。少人数のグループで問題解決に取り組む学習方法だ。グループワークやディスカッションを通して、協調性やコミュニケーション能力を育むことができる。下記の実践体験型PBLと比較すると、実践的な経験を積む機会が少ないというデメリットがある。だが、準備時間手間がいらぬことや、教室内で完結できることから、学校の授業で多く用いられる手法となっている。1965年にカナダで、**従来の受動的で退屈な講義形式に代わる学生主体の学習方法**を目指して始まった。

イ もう一つのPBL「**Project Based Learning**」は、「**課題解決型学習/プロジェクト型学習**」である。実際に現場に行き、課題解決に取り組む学習方法だ。地域の活性化や企業課題の解決等、実践的なテーマを設定。子ども自身が主体的に取り組むことを目的としている。前述のPBLと比較すると、より実践的な経験を積むことができるというメリットがある。しかし、民間企業や自治体との連携が必要なことや、授業準備が大変だというデメリットもある。探求型の学習は、こちらのPBLであろう。2つのPBLの良さを取り入れればよい。

(3) PBL学習とプロジェクト型学校組織改革との連動

令和の日本型教育～(2)連携・分担による学校マネジメントを実現する ・校長を中心に学校組織のマネジメント力の強化を図るとともに、学校内外との関係で「連携と分担」による学校マネジメントを実現 ・外部人材や専門スタッフ等、多様な人材が指導に携わることのできる学校の実現、 ・事務職員の校務運営への参画機会の拡大、教師同士の役割の適切な分担 ・学校・家庭・地域がそれぞれの役割と責任を果たし、相互に連携・協働して、地域全体で子供たちの成長を支えていく環境を整備 ・カリキュラム・マネジメントを進めつつ、学校が家庭や地域社会と連携し、社会とつながる協働的な学びを実現～とある。私は、これに子どもの参加を気付いた。学校組織やカリキュラム改革の中心は、教師だけではない。子ども達と教師が連携し、PBLの**プロジェクト型**でカリキュラムや校内研修を見直すよ。ある学校では、①生徒を主語にしたカリキュラムマネジメント改革**プロジェクト** ②行事や総合を見直す**プロジェクト** ③学習スタンダードを自校の文化にする**プロジェクト** ④授業等で身に付けた力を発揮する行事のための**プロジェクト**等である。探求的な学習に入るのもよいが、まずは、校内の足元の改革を見直すことが大切である。手本とする学校も出てきている。訪問校の学校におかれましては、更なる「子ども参加型の学校」を目指していただきたい。

セルフ授業への道のり



5 2030型セルフラーニング (2026年備品 298)

R 7.12.13に、高知県三原小・中学校での高知授業づくり研究会があった。それをまとめてみた。主体的な学びは同じだが、「個人(個別)学習・協力して学ぶ」ことをねらいにした。

(1) 学校って何? 「分からないことをなにかまに聞く場所」

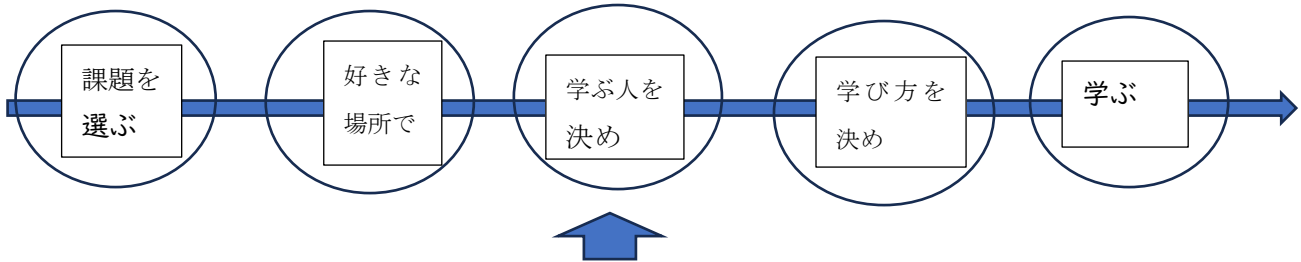
(2) 学校の意義を子ども間で決める

「子どもたちが先生を頼らず主体的に学び、安心して何でも取り組める学校」

(3) 主体性を改めて問う

①子どもの学び方の基準を変える(教師は、子どもを信じ、学びを任せる)

子どもが



これまでの授業(学校)

教師が教材研究をし、学習課題を決め、しゃべり、まとめる。教師主体の授業。

②子どもたちに学びを委ねる授業(三原大会の授業)

③授業で目指したこと

ア 授業を進めるのは教師ではなく自分たちであるという意識

イ 自分なりに問いを立て、課題をつくり学ぶ

ウ 学習方法やペースを自分で選び決め学ぶ(三原小の社会)

エ 同一学年から異学年と学ぶ(三原中の全校数学)

オ 授業評価の数値化



自分の課題選択
(三原小)



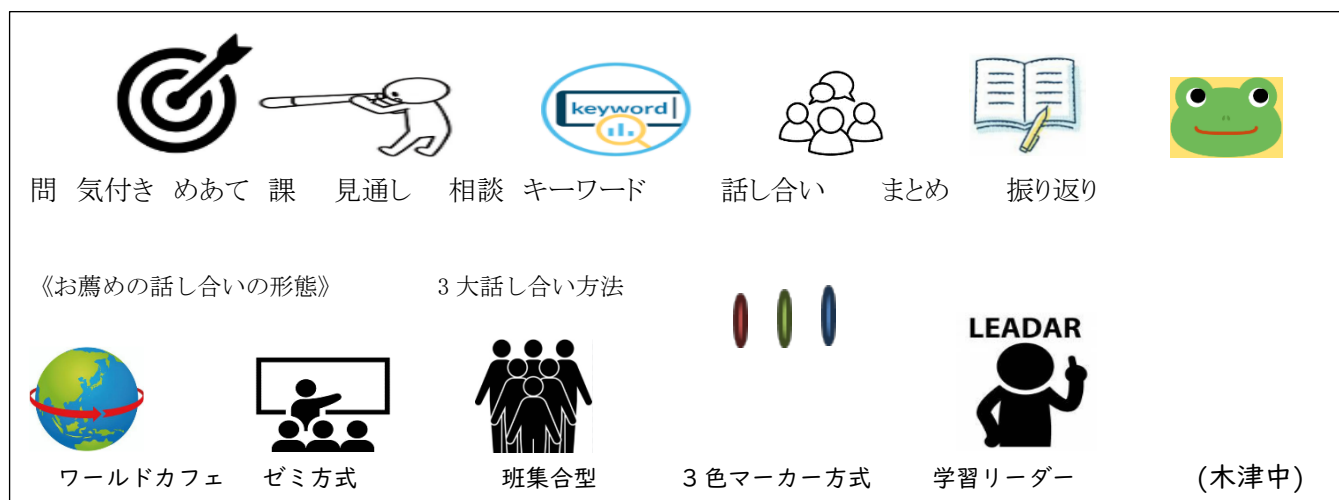
異学年で学ぶ
(三原中)

カ 学習過程(学習スタンダード)をピクトグラムで分かりやすくする

(4) 授業を変える方法

①問題解決学習過程を文字から「簡略と図式化」へ

課題→見通し→相談→自力→探る（班考察等）→話し合う→まとめ→振り返り



6 セルフ授業と学習リーダーの活躍

学力が向上した学校は、一人のスーパーティーチャーが活躍するのではなく、全教師が活躍している。昔のような名人芸に近い授業をする教師が授業をする学校ではない。その授業は、教師中心ではなく、「子ども活躍型」の授業だ。

その核となる「主体的・対話的で深い学び」は「子どもが授業を創る学習」だ。子どもが学び合いの中で自分の考えと違うときは相手に質問し、仲間と心を通わせ話し合い、分らない仲間に教えるような授業だ。

子どもたちが主体的な授業を創るためには、子ども自身が学び方を習得する必要がある。それには、指導者側に時間や労力がかかる。しかし、一旦子どもたちが学び方を身につければ、自分たちですいすいと授業を進めることができる。これが特長だ。

セルフ授業とは、そうした授業のことをいう。子どもたちが教師を頼らず自分たちで進める授業だ。街角にセルフガソリンスタンドやセルフレジがあるように、学校にもセルフ授業があってもよい。セルフ授業は全国ではすでに始まっている。

主体的・対話的で深い学びは、「動く、楽しく、考える」ことであると提案してきた。子供がこの学びを主体的に取り組むためには、「学習リーダー」が中心となる。学びの推進者である子供たちが楽しく動き考える学習は、教師ではなく子供が推進役となる。その中心が、「学習リーダー」だ。

学習リーダーは、単に「言語活動」の充実のための役割ではない。子供自身が学習の主体者としての意識をもち、仲間と協力して学習を進めるようにすることが役割である。

学習指導要領総則にも「各教科の指導にあたっては、自主的・自発的な学習が促されるように工夫すること。」とある。授業力とは、案外、教師より子ども身に付けるべき力ではないか。そのために学習リーダー（授業進行係）を置くとよい。

なお、複式学級では、リーダー学習として学級の児童生徒を「学習リーダー」として、学習を毎日進めている。通常学級しか経験のない教師は、その方法を学ぶとよい。学習リーダーの役割は、①学習の流れに従って、進行する ②簡単な事項について、指名したり、指示したりする ③一人学習やグループ学習などの時間設定をする ④グループ学習などで、意見や考えを整理する等だ。

以上のような法的根拠や実際に行われている複式学級の進行の仕方に学び、学習リーダーを置くとよい。

(1) 子供が授業を創る

「教材研究」「授業準備」等は、教師用語である。そこには、教師の多忙感が常にクローズアップされてきた。だが、子どもが授業を創ることから考えると、教材研究や授業準備も学習リーダーの役割の一つになる。教師の多忙感さえなくなるはずだ。教師主体の授業意識を変えるためにも、子どもが授業を創る方法に転換したい。教師は、学習の支援者に徹すればいいのだ。

(2) 学習リーダーの役割

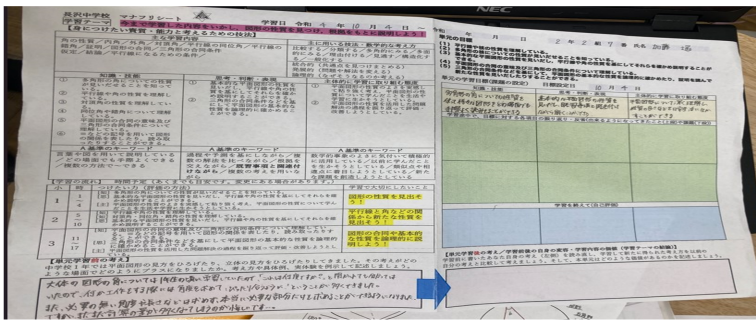
これまで教師が行ってきたことを整理すると、全部の仕事が教師の仕事ではないことに気付く。ここに注目をすると学習リーダーは、授業前に教材研究や授業準備をする役割があることに気付く。また、授業中は学習の進行、授業後は子供研究協議会の進行等がある。単に司会・進行が上手になるためだけではない。セルフ授業のように授業全体を見通して運営をする。仲間が「楽しい、もっとやってみようという学習」にする役割がある。

(3) 授業前 (学習リーダー) (備品 278)

①学習活動略案例 (学習指導案ではありません)

学習過程	学習活動	リーダー進行方法	子供全員が活躍する姿	教師の関わりと評価
ピクトグラム	1 問いの確認	1 3人組の相談の奨励 ピクトグラム		1 本時での徹底事項

②学習単元設定づくり (長沢中では、「マナフリシート (学習計画と振り返り)」)



マナフリシート

授業参観教科リーダーの振り返り



教科リーダーの振り返り

③学習課題やめあての作成と指導教師との打ち合わせ

④板書計画と問題解決学習グッズの掲示

⑤教材作成 (各教科のリーダーが担当)

⑥キーワード (教科用語) の作成

(4) 授業中

①司会・進行係

②キーワードの掲示

③タブレット・ノート・ホワイトボード利用の促し

④記録用のビデオカメラの設置

⑤班長への指示

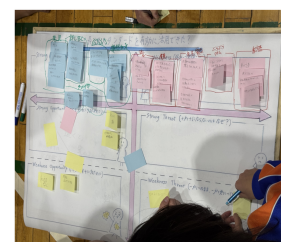
授業振り返り



研究構造図 (教師作成)



班集合型の学び



振り返り構図 (生徒作成)

⑥リーダーが折にふれ集合・確認作業

(5) 授業終了後

- ①子ども研究協議会（班→全体発表）
- ②生徒自身のワークショップ
- ③他学年参加の場合は、感想を聞く（付箋紙）

(6) 普段から行うこと

- ①生徒校内研究委員会の設置
- ②研究推進委員長（教師側）とひんばんな打ち合わせ
- ③校内廊下掲示板への研究物の作成・掲示
- ④研究冊子の作成

ア表紙絵 イ歓迎の言葉 ウ学習活動案 エ指導計画

⑤研究発表会

ア会場横断幕の作成 イ受付 ウ司会・進行 エ研究課題や研究の歩みの発表 オ記録 カ教師側研究主任

(7) 学習リーダーの当番

司会・進行は、学級の子供全員が輪番で行う。学習リーダーは、仲間の同士の言語活動を活発に行うようにする。何日かに一回、教科によっては毎日、話し合い活動の中心に身を置く。小学校の1年生は、日直が当番になり司会・進行を行う。中・高学年になるにしたがって、教科担当の子供が司会を務める。これは、学習の見通しや流れ、振り返りの仕方等が分かっている工夫も出来るからだ。

(8) 司会進行表

子供自身が学習の進行方法を理解し、自分たち自身で進行していけるようになることが重要だ。どの子も司会・進行が出来るように、「司会進行表」を作成する必要がある。これは当初だけで、慣れてくると必要ではなくなる。司会を数多く重ねることで、学習内容を理解するだけでなく、学び方を知ることにもつながる。この学び方は、教師にも通じる。教師の異動があっても授業づくりのための具体的な方法としてお互いに共有できると思う。

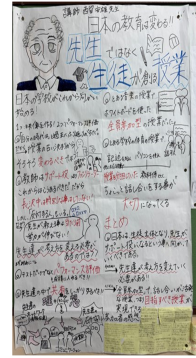
7 セルフラーニングの方向性

どこも、学習者主体、対話を掲げてるが、従来の学習の流れから脱却できていない現状がある。

学習スタンダードができてこそ複線型授業や自由進度学習は可能となる。

本当のDXの研究授業・探求的な学習・複線型の授業は、チーム学校を経て個を主体としたのセルフラーニング（学習スタンダード）が基盤にある。

廊下
掲
示
板



体育祭
文化祭
授業祭

